『観心本尊抄』題号における「観心本尊」の意味

庵谷行亨

一　はじめに

日蓮聖人（一二二二～一二八二）の最重要教義書とされている『観心本尊抄』は、正式名称を『如来滅後五五百歳始観心本尊抄』と称する。この題名は日蓮聖人が自ら付したものである。

これを『観心本尊抄』と略称したのは、本書を受け取った富木常忍であったと思われる。富木常忍の『常修院本尊聖教事』（永仁七年・一二九九）には「観心本尊抄　一帖」[1]とあり、また中山法華経寺蔵真蹟冊子の表紙には富木常忍の筆で「観心本尊抄」と記載されている。[2]これらのことから、富木常忍をはじめ、『観心本尊抄副状』にその名が見える太田・曾谷等の檀越が本書を受け取った当初頃から、『観心本尊抄』という略称が用いられていたと思われるのである。

本稿においては、『観心本尊抄』の題号における「観心本尊」の意味について考察したい。

二　題号の「観心本尊」についての諸師の解釈

1　「観心本尊」の読み方

「観心本尊」の読み方については諸師の分析的な解説がある。主なものを挙げると次の通りである。[3]

①「心の本尊を観ず」、②「心を観ずる本尊」、③「心を本尊と観ず」、④「心を観じて本尊と為す」、⑤「観心の本尊」、⑥「観心は本尊」、⑦「観心と本尊」、⑧「観心本尊」。

これらの解説や指摘には各先師の関係する門流の伝統的な解釈を反映するものもある。

「観心本尊」の読み方についての諸師の解説では「観心」について二意があることが分かる。一は本門寿量品文底の法門（事一念三千）で⑤⑧、二は「本門の題目」で⑦がこれに当たる。⑥は両意に理解される。

2 「観心本尊」についての解釈

題号の解釈は本抄の教義理解を反映する。とくに「観心本尊」の部分をどのように解釈するかは、『観心本尊抄』の本旨理解を左右する重要な問題を含んでいる。主な諸師の解釈を挙げるとほぼ次の通りである。

㈠「心の本尊を観ず」
日恵『観心本尊抄恵抄』『日蓮教学研究所紀要』第二一号（史料紹介）。

㈡「心の本尊なることを観ず」
日輝『観心本尊抄略要』『充洽園全集』第二編三一五頁。

㈢「観心の本尊」
山川智應著『観心本尊抄講話』一〇八頁。「法華経本門寿量品の観心たる、本仏果上の一念三千の本尊を主として顕説」。

㈣「観心と本尊」
日好『録内扶老』第六巻四丁。
清水龍山著『日蓮聖人遺文全集講義』第一一巻上一七～三四頁。
浅井圓道著『観心本尊抄　仏典講座38』一七頁。
渡邊寶陽・小松邦彰編『日蓮　日本の仏典9』四六二頁。
北川前肇著『日蓮聖人　観心本尊抄を読む』四四頁。

㈤「観心と本尊」（三大秘法密釈）
渡邊寶陽著『國寶観心本尊抄鑽仰』viii・四～五頁。

㈥「題目と本尊」（隠約、文裏に戒壇）
望月歓厚著『日蓮聖人御遺文講義』第三巻五六～五八頁。

㈦「観心本尊は一成句」
茂田井教亨著『観心本尊抄研究序説』二五～二九頁。

㈧「観心における本尊、本尊における観心」
茂田井教亨述『本尊抄講讃』上八五・九八頁。

㈣は観心としての題目と観心としての本尊の意で、これに㈤は三大秘法密釈、㈥は戒壇が文裏にあるとするものである。㈦・㈧は「観心における本尊」「本尊における観心」の意をもって観心本尊とする。

これら諸師の解釈の特色は主に次の四点に集約される。①観心重視の釈、②本尊重視の釈、③観心（題目）と本尊とする釈、④観心即本尊とする釈である。

①は㈠・㈡、②は㈢、③は㈣・㈤・㈥、④は㈦・㈧がこれに当たる。近年においては③観心（観心としての題目）と本尊（観心としての本尊）との釈が最も多い。

三　『観心本尊抄』述作の背景

『観心本尊抄』題号における「観心本尊」の意味を理解するために、『観心本尊抄』が述作された背景について確認しておきたい。

文永八年（一二七一）の一連の法難は日蓮聖人の身命に関わる重

大事件であった。それだけに日蓮聖人の宗教に与えた影響も多大であった。龍口法難・佐渡遠流をとおして、日蓮聖人は身体的にも精神的にも重大な局面に遭遇されたのである。そのような逼迫した情況が『開目抄』や『観心本尊抄』などの重要書の述作に繋がったと考えられるのである。

1 「数数見擯出」の経文の色読

弘長元年（一二六一）の伊豆配流とともにこの度の佐渡遠流は幕府という国家権力による公的法難であり、このような複数にわたる値難の体験は、法華経勧持品所説の「数数見擯出」の文を色読したことを意味する。

経文の色読完遂は、法華経所説の「真の法華経の行者」であることを証明するものである。すなわち「如説の法華経の行者」は法華経に証明された如来使であり、虚空会において別付嘱を蒙った本化地涌菩薩にほかならない。

2 「魂魄日蓮」の認識

『開目抄』には次のように述べられている。

> 日蓮といゐし者は去年九月十二日子丑の時に頚はねられぬ。此は魂魄佐土の国にいたりて、返年の二月雪中にしるして、有縁の弟子へをくれば、をそろしくてをそろしからず。みん人いかにをぢずらむ。此は釈迦・多宝・十方の諸仏の未来日本国当世をうつし給明鏡なり。かたみともみるべし。(4)

日蓮聖人は、今までの日蓮は龍口の首の座においていのちを終え、佐渡の日蓮は魂魄として蘇生した霊的日蓮であるとの認識をもたれた。その霊格者としての認識のなかで述作されたのが人開顕の書とされる『開目抄』、法開顕の書とされる『観心本尊抄』である。

3 死の危機

『法蓮鈔』には次のように述べられている。

> 殊に今度の御勘気には死罪に及べきが、いかが思はれけん佐渡の国につかはされしかば、彼国へ趣者は死は多、生は希なり。からくして行つきたりしかば、殺害謀叛の者よりも猶重く思はれたり。鎌倉を出しより日日に強敵かさなるが如し。(5)

さらに『報恩抄』には次のように述べられている。

> 又いかにやありけん、さど（佐渡）の国までゆく。今日切、あす切、といひしほどに四箇年というに……。(6)

死の危機感が「観心法門」の顕発を強く促した。「観心法門」を後世に伝えなければならないとの使命感が、『観心本尊抄』の述作を必然的なものとしたのである。日蓮聖人は、自らの死後においても「観心法門」が広宣流布されることを期された。『報恩抄』には「日蓮が慈悲曠大ならば、南無妙法蓮華経は万年の外未来までもながるべし。日本国の一切衆生の盲目をひらける功徳あり。無間地獄の道をふさぎぬ」(7)と述べられている。『観心本尊抄』所説の「観心法門」とは、『報恩抄』の文によれば「南無妙法蓮華経」にほかならない。

4　疑難への回答

『寺泊御書』には次のように述べられている。

或人難二日蓮一云　不レ知レ機立二麁義一値レ難。或人云如二勧持品一者深位菩薩義也。違二安楽行品一。或人云我存二此義一不レ言云云。或人云唯教門計也。理具我存レ之。[8]

日蓮の法門は「唯教門計也」との疑難に対し、「観心法門」の開示が必要であった。『観心本尊抄』の述作は世間の疑難に対する回答でもあったのである。

法門は教相と観心とが車の両輪のごとく相互に資助し合って体系を構築している。法華最勝義の主張は、世間の人々にとって教相偏重に映ったのである。日蓮聖人にとって、「観心法門」の表明は必然的要請でもあったのである。

5　「大事の法門」の開示

『観心本尊抄』が「大事の法門」を教示されたものであることは『観心本尊抄副状』に「此事日蓮当身大事也」とあることから明確である。なお、『観心本尊抄副状』の記述内容については後述する。

『観心本尊抄』の第八番問答には、「故至二止観正明二観法一。並以二三千一而為二指南一。乃是終窮究竟極説。故序中云説二己心中所行法門一。良有レ以也。請尋読者心無二異縁一等云云」[9]と、妙楽大師の『摩訶止観輔行伝弘決』の文が挙げられている。文中の「序中」は章安大師の序を指す。したがって、『摩訶止観』の「観法」を、章安大師は「己心中所行の法門」、妙楽大師は「終窮究竟の極説」とその重要性を称揚しているのである。このような天台大師の「観心法門」を、末法の本門教学の視点に立って論述した書が『観心本尊抄』にほかならない。

『観心本尊抄』と同じく佐渡で述作された『開目抄』には次のように述べられている。

此疑は此書肝心、一期の大事なれば、処々にこれをかく上、疑を強くして答をかまうべし。[10]

此は釈迦・多宝・十方の諸仏の未来日本国当世をうつし給明鏡なり。かたみともみるべし。[11]

佐渡における死の危機は、必然的に、これまで信解体得した「大事の法門」を門下に伝達し、その広布を未来に託すことを必要とする。『開目抄』『観心本尊抄』を始めとする佐渡での法門教示には、そのような切迫した動機が込められていた。

『波木井三郎殿御返事』には次のように述べられている。

鎌倉筑後房・弁阿闍梨・大進阿闍梨申小僧等有レ之。召レ之可レ有二御尊一。可レ有二御談義一。大事法門等粗申。彼等日本未二流布一大法少々有レ之。随御学問可二注申一也。[12]

佐渡から、波木井三郎に対して、鎌倉の筑後房・弁阿闍梨・大進阿闍梨等を召して「大事の法門等」を聴聞するように教示されている。このことは、かねてより日蓮聖人が門弟に説き示されていた教

えが「大事の法門」であったことを示している。

以上から、『観心本尊抄』は『開目抄』と共に日蓮聖人がいのちを懸けた最重要法門の教示であったことが分かる。その最重要法門を『開目抄』では「本門寿量品の文の底」「本因本果の法門」「真の一念三千」、『観心本尊抄』では「観心の法門」と表現されたのである。

したがって、『観心本尊抄』題号の「観心本尊」は最重要教義としての「観心の法門」の意であることが分かる。

四　『観心本尊抄副状』の記述

題号の「観心法門」の意味を理解するために、『観心本尊抄』に副えられた『観心本尊抄副状』の記述内容について検討したい。

『観心本尊抄副状』には次のように述べられている。

> 帷一・墨三長・筆五巻給候了。観心法門少々注レ之奉二太田殿教信御房等一。此事日蓮当身大事也。秘レ之見二無二志一可レ被レ開二祐之一歟。此書難多答少。未聞之事人耳目可レ驚二動之一歟。設及二他見一三人四人並レ座勿レ読レ之。仏滅後二千二百二十余年未レ有二此書之心一。不レ顧二国難一期二五五百歳一演二説之一。乞願歴二一見一来輩師弟共詣二霊山浄土一拝二見三仏顔貌一。[13]

『観心本尊抄』は文永一〇年（一二七三）四月二五日に述作され、翌日の二六日に認められた送状（『観心本尊抄副状』）を副えて、下総の檀越である富木常忍のもとに届けられた。『観心本尊抄副状』は、冒頭に富木常忍からの供養に対する感謝を述べ、『観心本尊抄』述作の意図や内容の重要性、披見の際の心構え、師弟共なる霊山浄土への往詣の確信等について綴られている。

ここでは、『観心本尊抄副状』をとおして『観心本尊抄』述作の趣旨を確認しておきたい。

1　『観心本尊抄』は「観心法門」を「注」する意を込めて「撰」したもの

『観心本尊抄』は題号に続いて「本朝沙門日蓮撰」と署名されている。『観心本尊抄』の本文末には「日蓮註之」[14]、『観心本尊抄副状』には「観心法門少々注レ之」と記載されている。したがって『観心本尊抄』は注の意味を込めて撰述されたことが分かる。このことは冒頭に『摩訶止観』結成理境の文を挙げ、一念三千の出処を天台三大部の中に論明されていることからも理解される。日蓮聖人は『摩訶止観』の観心に立脚して、末法の大事たる「本門の観心」を注するとの意図をもって『観心本尊抄』の述作に望まれたのである。単なる撰や注ではなく、天台大師所述の観心法門を注し撰述するとの姿勢は、先師称揚と共に天台大師の『摩訶止観』に連なる観心教学の正統性を示すものでもあったと思われるのである。

2　『観心本尊抄』は有力檀越をはじめ信心堅固な門下への教示

『観心本尊抄副状』の宛名に「富木殿御返事」とあり、『観心本尊抄副状』の本文中に「奉二太田殿教信御房等一」とある。このことか

ら、『観心本尊抄』は富木常忍をはじめ太田乗明・曾谷教信などの下総の有力檀越に与えられ、ひいては信心堅固な門下に教示されたものと思われる。

『観心本尊抄』が信心堅固な門下に教示されたものであることは以下の記述から理解される。『観心本尊抄副状』には「設及二他見一三人四人並レ座勿レ読レ之」「乞願歴二一見一来輩師弟共詣二霊山浄土一拝二見三仏顔貌一」とある。「設及二他見一」とは、慎重な配慮が必要ではあるが「他見に及ぶ」ことが想定されている。「一見を歴」る者は「無二の志」を有する信心堅固者でなければならないから、「一見」の可否は信心にあることが分かる。したがって、『観心本尊抄』は有力檀越とともに信心堅固な門下に教示されたものと考えられるのである。堅固な信心とは、題目への絶対的帰信であり、それは不惜身命の決意・自覚とその実践を意味する。

同様に「一期の大事」とされた『開目抄』は、『富木殿御返事』に「法門之事先度四条三郎左衛門尉殿令二書持一。其書能々可レ有二御覧一」[15]とあり、『開目抄』本文に「此は魂魄佐土の国にいたりて、返年の二月雪中にしるして、有縁の弟子へをくれば」[16]とあることから、直接的には四条金吾頼基に与えられ、ひいては広く「有縁の弟子」に教示されたものと考えられている。

法門の広宣流布は日蓮聖人をはじめ門下一同の願いである。法門広布において檀越の果たす役割は大きい。布教の原点は信仰にあることから、弟子はもとより檀越の法門信解は必須の課題である。弟子と檀越とが心を一にしてこそ法門の広布はよりいっそうその実をあげることができる。日蓮聖人が『開目抄』『観心本尊抄』などの重要法門を檀越に充てられたのは、檀越の教化とともに広宣流布の充実を意図されたものと思われるのである。

3　『観心本尊抄』は当身の大事

『観心本尊抄副状』には「此事日蓮当身大事也」と述べられている。「観心法門」を「注」し「撰」することは、日蓮聖人にとって「当身の大事」であった。同じく佐渡で述作された『開目抄』には前引のごとく「一期の大事」とある。「当身の大事」は身命に関わる重大事、「一期の大事」は生涯においてもっとも大切な事を意味する。『観心本尊抄』における「観心の法門」と『開目抄』における「真の一念三千」[17]はともに日蓮聖人にとっての最重要法門であったのである。

4　『観心本尊抄』は秘すべき書

『観心本尊抄副状』には「秘レ之」「設及二他見一三人四人並レ座勿レ読レ之」と述べられている。『観心本尊抄』が「秘」すべき書であり、「三人四人並レ座勿レ読レ之」ということは、「観心法門」はみだりに公開してはならない重要法門であり、その法門を叙述した『観心本尊抄』の披見には慎重な配慮が必要であるとの教示である。その理由は『観心本尊抄副状』に示されているように、未曾有の法門であり

難信難解のため、国難忍受の覚悟が必要であるためである。

5 『観心本尊抄』の披見には堅固な信心が必要

『観心本尊抄副状』には「見二無二志一可レ被レ開二祐之一歟」と述べられている。人心を驚動せしめる未曾有の重要法門であるために、『観心本尊抄』の披見には「無二の志」を必要とされる。披見に堅固な信心を必要とすることは、法華経における方便品の三止三請と如来寿量品の三戒三請を想起せしめる。両品ともに所説の法門の重要性を示した訓戒である。日蓮聖人はこのような意味を込めて『観心本尊抄』の披見に堅固な信心を必須要件とされたと思われるのである。

6 『観心本尊抄』は難解な書

『観心本尊抄副状』には「難多答少」と述べられている。『観心本尊抄』が難解な書であることは、本文中において難信難解の問答が繰り返されていることからも理解される。とくに第一〇番問答においては、問者が「不審云」と問題提起し、答者は「此事難信難解也」[18]と答え、教門と観門との難信難解について論が展開されている。『観心本尊抄』全体が「難多答少」の法門を叙述しているのである。秘すべき未聞の大事法門である以上、難信難解であることは避けられない。

7 『観心本尊抄』の内容は「未聞」の法門

『観心本尊抄副状』には「未聞之事」「人耳目可レ驚二動之一歟」「仏滅後二千二百二十余年未レ有二此書之心一」と述べられている。日蓮聖人が信解体得された法門は未曾有法であるために、人々にとっては「未聞」であり、そのために耳目を「驚動」せしめることになる。「観心法門」が未曾有法であることについては、日蓮聖人遺文の随所において、正法時代の龍樹・天親、像法時代の天台・伝教と比較して「未有」「未曾有」「未弘」「始」「初」などと表明されている。また、大曼荼羅本尊においては「一閻浮提之内未有大曼荼羅也」[19]、「一閻浮提之内未曾有大曼荼羅也」[20]などと記載されていることが多い。

法華経には方便品の冒頭部分において、世尊が舎利弗に対して難解難入の理由を「未曾有法」[21]と説明されている。また譬喩品では、諸天子が世尊の法華経説法を「未二曾聞一如レ是深妙之上法一」[22]と述べたことが説かれている。法華経自体が「難解難入」「未曾有法」であり、末法時の「観心法門」は濁悪世の大法であれば、よりいっそう難信難解となる。

8 『観心本尊抄』は忍難の法門教示

『観心本尊抄副状』には「不レ顧二国難一期二五五百歳一演二説之一」と述べられている。「観心法門」が大難とともにあることは日蓮聖人遺文に繰り返し説示されている。なかでも『富木入道殿御返事』には次のようにある。

止観に三障四魔と申は権経を行ずる行人の障にはあらず。今日蓮が時具に起れり。又天台伝教等の時の三障四魔よりも、いまひとしをまさりたり。一念三千観法に二あり。一理、二事なり。

天台・伝教等の御時には理也。今は事也。観念すでに勝る故、大難又色まさる。彼は迹門の一念三千、此は本門一念三千也。天地はるかに殊也こと也と、御臨終の御時は御心へ有るべく候。[23]

如来滅後における法華経の弘通が大難とともにあることは、法華経の法師品[24]・見宝塔品[25]・勧持品[26]・安楽行品[27]・常不軽菩薩品[28]等に繰り返し説示されている。日蓮聖人はこれに加えて『涅槃経疏』の「身軽法重死身弘法」[29]の文を挙げ値難の必然性を論じられることが多い。

法難に値遇することは経文に符合することでもある。したがって、弘教の決断には値難の覚悟が必要である。日蓮聖人は『開目抄』に次のように吐露されている。

日本国に此をしれる者、但日蓮一人なり。これを一言も申出すならば父母・兄弟・師匠国主王難必来べし。いわずば慈悲なきにこたりと思惟するに、法華経・涅槃経等に此二辺を合見るに、いわずわ今生は事なくとも、後生は必無間地獄に堕べし。いうならば三障四魔必競起るべしとし（知）ぬ。二辺の中にはいうべし。王難等出来の時は退転すべくは一度に思止べし、と且やすらい（休）し程に、宝塔品の六難九易これなり。我等程の小力の者須弥山はなぐとも、我等程の無通の者乾草を負て劫火にはやけずとも、我等程の無智の者恒沙の経々をばよみをぼうとも、法華経は一句一偈末代に持がたしと、とかるゝはこれなるべし。今度強盛の菩提心ををこして退転せじと願しぬ。[30]

釈尊のご本意を覚知した日蓮聖人は、「知ったこと」を言うべきか否かについて熟慮された。「申出す」「いう」とは「三障四魔」の大難を覚悟することである。熟慮の結果、日蓮聖人は「二辺の中にはいうべし」と決断された。日蓮聖人の決断は「強盛の菩提心ををこして退転せじと願しぬ」との誓いに立脚したものであった。この覚悟と決断によって、本門の大法が末法悪世に出現することになったのである。

以上のことから、『観心本尊抄』は、難信難解にして忍難を必要とする未曾有の秘すべき大事な「観心法門」を、天台大師の『摩訶止観』を注する形式をとって撰述し、有力檀越をはじめ信心堅固な門下に教示された書物であることが分かる。

五　佐後法門の重要性

『三澤鈔』には次のように述べられている。

又法門の事はさど（佐渡）の国へながされ候し已前の法門は、ただ仏の爾前の経とをぼしめせ。此国の国主我をもたもつべくば、真言師等にも召合せ給はずらむ。爾時まことの大事をば申べし。弟子等にもなひなひ（内々）申ならばひろう（披露）してかれらしり（知）なんず。さらばよもあわ（合）じとをもひて各々にも申ざりしなり。而去文永八年九月十二日の夜、たつの口にて頚をはねられんとせし時よりのち（後）、ふびんなり、

我につきたりし者どもにまことの事をいわ（言）ざりける、とをも（思）てさどの国より弟子どもに内々申法門あり。此は仏より後迦葉・阿難・龍樹・天親・天台・妙楽・伝教・義真等の大論師大人師は知てしかも御心の中に秘せさせ給し、口より外には出給はず。其故は仏制して云く、我滅後末法に入らずば此大法いうべからずとありしゆへなり。日蓮は其御使にはあらざれども其の時剋あたる上、存外に此法門をさとりぬれば、聖人の出させ給までまづ序分にあらあら申なり。而に此法門出現せば、正法像法に論師人師の申せし法門は皆日出て後の星光巧匠の後に拙を知るなるべし。此時には正像の寺堂の仏像僧等の霊験は皆きへうせて、但此大法耳（のみ）一閻浮提に流布すべしとみへて候。各々はかゝる法門にちぎり有人なればたのもしとをぼすべし。[31]

日蓮聖人の生涯を佐前・佐後に二分する場合と鎌倉期・佐渡期・身延期の三期に分けて理解する場合とがある。二分した時は三期の内の鎌倉期を佐前、佐渡期・身延期を佐後とする。

前掲の『三澤鈔』の文から明らかなとおり、佐前は「さど（佐渡）の国へながされ候し已前」であり、その法門は「ただ仏の爾前の経とをぼしめせ」であることから、方便法の意味を持っている。佐後の法門は「まことの大事」「内々申法門」「大法（末法の大法）」であると教示されている。

したがって、佐渡で述作された『観心本尊抄』の法門は、日蓮聖人における「内々申すまことの大事法門」の開示であったのである。

六　『観心本尊抄』本文に見える「観心」

『観心本尊抄』の本文中には「観心」について次のように述べられている。

①問曰出処既聞レ之。観心之心如何。答曰観心者観二我己心一見二十法界一。是云二観心一也。譬如下雖レ見二他人六根一未レ見二自面六根一不レ知二自具六根一。向二明鏡一之時始見中自具六根上。設諸経之中所々雖レ載二六道並四聖一不レ見二法華経並天台大師所述摩訶止観等明鏡一不レ知二自具十界百界千如一念三千一也。[32]

第一二番問答の文である。観心とは「観二我己心一見二十法界一」と説明されている。これについては、対境を十法界とする点は天台の実相よりも具体性があるものの、「観我己心」とすることなどにおいては台家に親しいとの解釈もある。[33]

②問曰龍樹天親等如何。答曰此等聖人知而不レ言之仁也。或迹門一分宣レ之不レ云二本門与観心一。或有レ機無レ時歟。或機時共無レ之歟。天台伝教已後知レ之者多々也。用二聖智一故也。所謂三論嘉祥・南三北七百余人・華厳宗法蔵清涼等・法相宗玄奘三蔵慈恩大師等・真言宗善無畏三蔵金剛智三蔵不空三蔵等・律宗道宣等初存二反逆一後一向帰伏也。[34]

第一九番問答の文である。凡心具仏の難信難解について龍樹・天親の立場を説明した文章中に迹門・本門に並んで観心の語が見える。龍樹・天親は迹門の教相の一分を説いたが本門の教相と本門の観心については宣説することがなかったとの意味である。このことについては『報恩抄』に次のように述べられている。

迦葉・阿難等は一向に小を弘、馬鳴・龍樹・無著・天親等は権大乗を弘て、実大乗の法華経をば或は但指をさして義をかくし、或は経の面をのべて始中終をのべず。或は迹門をのべて本門をあらはさず。或は本迹あつて観心なしといひしかば……。[35]

仏弟子や天竺の諭師は小乗・権大乗・実大乗の法華経本迹の教相を述べて本門の観心は顕していないとされている。迹門の教相は二乗作仏、本門の教相は久遠実成、本門の観心は事一念三千を指す。

七　『観心本尊抄』の構成

『観心本尊抄』の構成について、主な解説書の目次を挙げると次のとおりである。

①山川智應著『観心本尊抄講話』三～一〇頁。

「序分　無問自説法門提唱段　観心法門の本拠を提示し十六番に問答して理具を疑ひ事具を迫り出し特に事具仏界を疑ふ」「正宗分　三重問難本懐顕発段　妙法受持因果譲与に因る凡夫の事具仏界を明かし本門一念三千の法体とその本尊の体相を顕発す」「流通分　十番推検本法流通段　地涌の菩薩末法の初めに出現して本門本尊と事行の五字を弘通するを示し兼ねて本門本尊を密釈する」。

②清水龍山著『日蓮聖人遺文全集講義』第一一巻上二～一四頁・下一～七頁。

「第一段　観心を明す」「第二段　本尊を明す」。

③望月歓厚著『日蓮聖人御遺文講義』第三巻一～一四頁。

「第一段（能観段）観心を明す（序分）」「第二段（所観段）本尊を奠む」「第三段（弘通段）所弘の時の未曾有なると、能弘の師の始弘なるとを明す（流通分）」。

④茂田井教亨述『本尊抄講讃』上四五～四七頁。

全体を八章に分ける。

⑤浅井圓道著『観心本尊抄　仏典講座38』五～八頁。

「第一　能観の題目の段」「第二　所観の本尊の段」「第三　流通の段」。

⑥渡邊寶陽著『國寶観心本尊抄鑽仰』x～xix頁。

「第一段　心を究めつくす御題目（観心段）」「第二段　一心に帰命すべき本尊とは（本尊段）」「第三段　大いなる教えを弘通する（弘通段）」。

⑦小松邦彰著『観心本尊抄訳注』一〇頁。

「第一　題目段」「第二　本尊段」「第三　弘通段」。

⑧北川前肇著『日蓮聖人　観心本尊抄を読む』目次・七〇～七三頁。

全体を八章に分けた茂田井教亨述『本尊抄講讃』に基づき、全二十四講にわたって解説する。

以上のとおり、『観心本尊抄』は全体を三段に分けて解釈されることが多い。大まかに見ると、第一は能観の題目段、第二は所観の本尊段、第三は大法の弘通段である。このような構成から、先師には『観心本尊抄』を観心（本門の題目）と本尊（本門の本尊）を説いた書と解釈する例が多いと考えられるのである。

八　諸遺文における「観心」

諸遺文における「観心」の表記は次の通りである。[36]

①『尊霊御菩提御書』

大田殿、次郎入道殿御事は観心之法門時可レ申。[37]

大田殿と次郎入道殿のことは「観心之法門」を説明する時に申し述べるとされている。『観心本尊抄副状』の「観心法門少々注レ之奉二太田殿教信御房等一」の叙述からして「大田殿」は太田乗明と推測される。ただし本遺文は前後欠損の五行断簡であることから、詳細については不明である。系年について『昭和定本日蓮聖人遺文』は建治元年（一二七五）、『日蓮大聖人御真蹟対照録』は文永一〇年（一二七三）と推定している。対告は記述内容から富木常忍とされている。

②『報恩抄』

迦葉・阿難等は一向に小を弘、馬鳴・龍樹・無著・天親等は権大乗を弘て、実大乗の法華経をば或は但指をさして義をかくし、或は経の面をのべて始中終をのべず。或は迹門をのべて本門をあらはさず。或は本迹あつて観心なしといひしかば……。[38]

すでに「六　『観心本尊抄』本文に見える「観心」」の項で関連遺文として挙げた文である。ここでは一切経を小乗経・権大乗経・実大乗経（法華経）の迹門・本門・観心と区分して挙げられている。ここで言う本門は迹門に対する法華経後半十四品本門、観心は教相に対する表現である。『開目抄』の五重相対では「但仏教に入て五十余年の経々八万法蔵を勘たるに、小乗あり大乗あり、権経あり実経あり、顕教密教、軟語麁語、実語妄語、正見邪見等の種々の差別あり。但法華経計教主釈尊の正言也」と内外・大小・権実・本迹と比較相対して、最終的に「一念三千の法門は但法華経の本門寿量品の文の底にしづめたり。龍樹天親知て、しかもいまだひろいいださず。但我が天台智者のみこれをいだけり」[39]と文底観心を明かされている。日蓮聖人の教相論においては、小乗経・権大乗経・実大乗の法華経迹門・実大乗の法華経本門・観心という区分と浅深があることは言うまでもないが、本門・観心については遺文上の用い方によって、意味が異なることに注意が必要である。[40]

③『事理供養御書』

たゞし仏になり候事は、凡夫は志ざしと申文字を心へて仏になり候なり。志ざしと申はなに事ぞと、委細にかんがへて候へば、観心の法門なり。観心の法門と申はなに事ぞとたづね候へば、たゞ一きて候衣を法華経にまいらせ候が、身のかわをはぐにて候ぞ。うへ（飢）たるよ（世）に、これはなしては、けう（今日）の命をつぐべき物もなきに、たゞひとつ候ごれう（御料）を仏にまいらせ候が、身命を仏にまいらせ候にて候ぞ。これは薬王のひぢをやき、雪山童子の身を鬼にたびて候にもあいをとらぬ功徳にて候へば、聖人の御ためには事供やう（養）、凡夫のためには理くやう。止観の第七の観心の檀ばら密（蜜）と申法門なり。まことのみちは世間の事法にて候。金光明経には、若深識世法即是仏法とかれ、涅槃経には一切世間外道経書皆是仏説非外道説と仰られて候を、妙楽大師法華経の第六の巻の一切世間治生産業皆与実相不相違背の経文に、引合て心をあらわされて候には、彼々の二経は深心の経々なれども、彼の経々はいまだ心あさくして法華経に及ざれば、世間の法を仏法に依せてしらせて候。法華経はしからず。やがて世間の法が仏法の全体と釈せられて候。爾前の経々の心は、心より万法を生ず。譬へば心は大地のごとし、草木は万法のごとしと申。法華経はしからず。心すなはち大地、大地則草木なり。爾前経々の心は、心のすむは月のごとし、心のきよきは花のごとし。法華経はしからず。月こそ心よ、花こそ心よと申法門なり。此をもつてしろしめせ。白米は白米にはあらず。すなはち命なり。美食ををさめぬ人なれば力をよばず山林にまじわり候ぬ。されども凡夫なればかん（寒）も忍がたく、熱をもふせぎがたし。食ともし。表〇目が万里の一飡忍がたく、思子孔が十旬九飯堪べきにあらず。読経の音も絶ぬべし。観心の心をろそかなり。しかるにたまたまの御とぶらいたゞ事にはあらず。教主釈尊の御すゝめか、将又過去宿習の御催か、方々紙上難〻尽。[41]

凡夫は「志ざし」を「心へて」こそ成仏するとし、「志ざし」とは「観心の法門」であり、「たゞ一きて候衣を法華経にまいらせ」「身のかわをはぐ」ことであると説明されている。すなわち「観心の法門」とは「身命を仏にまいらせ」ることである。続いて聖人の事供養（不惜身命）と凡夫の理供養（志ざし）を説いて、これを『摩訶止観』の「観心の檀ばら密（蜜）と申法門」とされている。さらに「まことのみちは世間の事法」であるとして世法即仏法の経文を挙げ、法華経は「心すなはち大地、大地則草木」「月こそ心よ、花こそ心よ」という法門であるとして、供養の品々は「すなはち命」であるとされている。食物供養の功徳を明かし、身延山中の生活の困苦を披瀝して「読経の音も絶ぬべし。観心の心をろそかなり」と述べ、この度の供養に対し「教主釈尊の御すゝめか、将又過去宿習の御催か」

と甚深の謝意を示されている。文意から観心とは法華経釈尊に身命を捧げることであり、法華経釈尊と一体化することであることが分かる。法華経釈尊に身命を捧げる日蓮聖人に供養することは、檀越の「観心の檀ばら密（蜜）」であり、日蓮聖人と共に「観心の法門」を実修していることを意味する。

九　『観心本尊抄』の題号における「観心本尊」の意味

『観心本尊抄』は、題号のままに受け取ると「観心本尊」を著した書ということになる。

本書の叙述内容に即して集約すると「観心としての題目」「観心としての本尊」「観心としての戒壇（密示）」「観心としての弘通」を教示されたものと考えられる。「観心としての題目」は本門の題目、「観心としての本尊」は本門の本尊、「観心としての戒壇（密示）」は本門の戒壇、「観心としての弘通」は本門の事行を意味する。

なお、戒壇の密示とは本文中に明記はないものの、日蓮聖人の内証としてあったものとして理解することである。[42]

『法華行者値難事』[43]、『法華取要抄』[44]、『報恩抄』[45]の文によれば、末法の「大法」「秘法」「正法」「本門三法門」を表明される時は、本門の本尊・本門の戒壇・本門の題目の三大秘法を整束して挙げられている。

日蓮聖人の観心は「題目五字七字」に集約される。本門の本尊・本門の題目・本門の戒壇の三大秘法は畢竟「題目五字七字」にほかならない。一大秘法は三大秘法に開出され、三大秘法は一大秘法に結実する。

また、三大秘法は、本門の本尊に信心帰依し、本門の題目を信受念持して、本門の戒壇を現成する法門である。三大秘法はそれぞれが密接に関連し合って本門の信行を成就する。本門の本尊に本門の題目・本門の戒壇を、本門の題目に本門の本尊・本門の戒壇を、本門の戒壇に本門の本尊・本門の題目をそれぞれ具備するのである。

このことからして、日蓮聖人の意図としては、『観心本尊抄』題号における「観心本尊」には、「観心としての題目」「観心としての本尊」「観心としての戒壇（密示）」「観心としての弘通」の意味が内包されているのではないかと考えられる。すなわち三秘相即・三秘総在の「観心本尊」である。

このことは日蓮聖人の教学の根幹が一念三千にあることからも理解される。本門の本尊は、『観心本尊抄』に「一念三千仏種」[46]と示されている。本門の題目は、同じく『観心本尊抄』に「一念三千の観心としての題目受持」[47]、『開目抄』に「一念三千法門としての本門寿量品文底の観心」[48]が明かされている。さらに『観心本尊抄』の巻末には「不レ識二一念三千一者仏起二大慈悲一五字内裏二此珠一令レ懸二末代幼稚頸一」[49]と一念三千の観心が題目五字であることが示されている。本門の戒壇は本仏常住の本土でもあることから、寿量品の発迹顕本に

成就する。仏の顕本は本仏・本土のみならず本法・本弟子の真実開顕でもある。そこに本因・本果・本国土の三妙が具足した「真の一念三千」[50]が顕現するのである。『観心本尊抄』ではこれを「本時娑婆世界」[51]と表現されている。また、本門の戒壇は、本門の本尊に帰依し本門の題目を受持することにおいて現成することから、もとより一念三千の境界であることに変わりはない。

三秘相即に関する表記は諸遺文に見られる。『観心本尊抄』第二〇番問答の答文には次のように述べられている。

此本門肝心於二南無妙法蓮華経五字一仏猶文殊薬王等不レ付二属之一。何況其已下乎。但召二地涌千界一説二八品一付二属之一。其本尊為レ体本師娑婆上宝塔居レ空塔中妙法蓮華経左右釈迦牟尼仏・多宝仏。釈尊脇士上行等四菩薩文殊弥勒等四菩薩眷属居二末座一迹化・他方大小諸菩薩万民処二大地一如レ見二雲閣月卿一。十方諸仏処二大地上一。表二迹仏迹土一故也。如レ是本尊在世五十余年無レ之。八年之間但限二八品一。正像二千年之間小乗釈尊迦葉阿難為二脇士一。権大乗並涅槃・法華経迹門等釈尊以二文殊普賢等一為二脇士一。此等仏造二画正像一未レ有二寿量仏一。来二入末法一始此仏像可レ令二出現一歟。[52]

引用文は「本時娑婆世界」の記述を承けて「迹門十四品未レ説レ之。於二法華経内一時機未熟故歟」[53]と述べられた次下の文章である。「本時娑婆世界」が迹門未説の教えであることを確認されたのは、「本時娑婆世界」はもとより、この後に明かす「本門の肝心南無妙法蓮華経の五字」（本門の題目）と「本尊の為体（ていたらく）」（本門の本尊）が、本門にのみ説き明かされた最重要法門であるからである。

「本門の肝心南無妙法蓮華経の五字」は法華経八品において地涌菩薩に付嘱されたとし、これを承けて「其本尊為レ体」と本尊の相貌を明かし、その本尊は「但限二八品一」とされている。さらに正法・像法時の本尊（釈迦三尊）を挙げ、末法における「寿量の仏」出現の必然性を論じられている。末法に出現する本尊は本化四菩薩を脇士とする「仏像」（「寿量の仏」）であることは文脈から明らかである。[54]

このように、「本時娑婆世界」を承けて「本門の肝心南無妙法蓮華経の五字」が地涌菩薩に付嘱されたことを述べ、「其本尊為レ体」と本尊の相貌を明かし、末法における本尊出現の道理を示されている。ここには「本時娑婆世界」を基点に、「地涌千界にのみ付嘱された本門の肝心南無妙法蓮華経の五字」（本門の題目）・「本門八品所顕の本尊」（本門の本尊）が同じ意味（本質的同意）をもって連続的に論じられていることが分かる。

また『観心本尊抄』第二九番問答の答文には次のように述べられている。

像法中末観音薬王示二現南岳天台等一出現以二迹門一為レ面以二本門一為レ裏百界千如一念三千尽二其義一。但論二理具一事行南無妙法蓮華経五字並本門本尊未二広行一レ之。所詮有二円機一無二円時一故也。[55]

像法時における迹面本裏の理具一念三千に対して、末法時は「事行の南無妙法蓮華経の五字並びに本門本尊」であることを示し、像法の中末に「観音薬王示二現南岳天台等一出現」したが事行の法門は「有二円機一無二円時一故」に「未二広行一レ之」とされている。像法時が迹面本裏の理具一念三千であれば末法時は本面迹裏の事具一念三千となるところを、末法時は「事行の南無妙法蓮華経の五字並びに本門本尊」と表記されている。事具一念三千が「事行の南無妙法蓮華経の五字並びに本門本尊」であることを意味している。

『顕仏未来記』には次のように述べられている。

諸天善神並地涌千界等菩薩守二護法華行者一。此人得二守護之力一以二本門本尊・妙法蓮華経五字一令四広二宣流三布於閻浮提一歟。例如下威音王仏像法之時不軽菩薩以二我深敬等二十四字一広二宣流三布於彼土一招中一国杖木等大難上也。彼二十四字与二此五字一其語雖レ殊其意同レ之。彼像法末与二是末法初一全同。彼不軽菩薩初随喜人日蓮名字凡夫也。(56)

「本門本尊」と「妙法蓮華経五字」を並記し、「威音王仏像法之時」の不軽菩薩の「我深敬等の二十四字」と今末法時の自身の「五字」とを対比して「其語雖レ殊其意同レ之」「彼像法末与二是末法初一全同」とその共通性を指摘されている。末法時に「諸天善神並地涌千界等菩薩」の「守護之力」を得て「本門本尊・妙法蓮華経五字」を「閻浮提」に「広宣流布」せしめることを、「此五字」と表現されている。このことは、日蓮聖人において、「本門本尊」と「妙法蓮華経五字」について共通性・同質性・同義性の認識があったことを意味している。

『富木殿御返事』には次のように述べられている。

設日蓮死生雖レ為二不定一妙法蓮華経五字流布無レ疑者歟。伝教大師御本意円宗為レ弘二日本一。但定慧存生弘レ之円戒死後顕レ之。為二事相一故一重大難有レ之歟。仏滅後二千二百二十余年、于レ今寿量品仏与二肝要五字一不二流布一。当時論二果報一者恐者超二伝教・天台一勝二龍樹・天親一歟。無二文理一者大慢豈過レ之哉。(57)

日蓮の死生が不定であっても「妙法蓮華経五字流布無レ疑者歟」と題目流布について触れ、伝教大師の円宗の定慧は生前、円戒は死後に顕わされたとし、果報勝れるゆえに「寿量品仏与二肝要五字一」の流布の確信を述べられている。「妙法蓮華経五字」を「寿量品仏与二肝要五字一」と受ける文脈に、日蓮聖人における題目と本尊の同義性が看取できる。(58)

『波木井三郎殿御返事』には次のように述べられている。

正法一千年龍樹天親等為二仏御使一弘レ法。雖レ然但弘二通小権二教一実大乗未レ弘二通之一。入二像法五百年一天台大師出二現漢土一破二失南北邪義一立二正義一。所謂教門五時観門一念三千是也。拳レ国号二小釈迦一。雖レ然於二円定円慧一者弘二宣之一円戒未レ弘レ之。仏滅後入二一千八百年一日本伝教大師出二現世一自二欽明一已来二百余年

之間六宗邪義破二失之一。其上天台未レ弘円頓戒弘二宣之一。所謂叡山円頓大戒是也。但仏滅後二千余年三朝之間数万寺々有レ之。雖レ然本門教主寺塔地涌千界菩薩別所二授与一妙法蓮華経五字未レ弘二通之一。有二経文一無二国土一。時機未レ至故歟。（略）当レ知所レ残本門教主、妙法五字流二布一閻浮提一無レ疑者歟。[59]

正法時における龍樹・天親の弘法、像法時における天台大師の「教門の五時と観門の一念三千」（円慧・円定）と伝教大師の「叡山の円頓の大戒」（円戒）をあげ、末法時においては「本門教主の寺塔と地涌別付の妙法蓮華経の五字」が流布することの確信を述べられている。像法時における天台大師・伝教大師の「円の三学」実現の功績にふれ、末法時における本門法門の流布を期される文脈は前掲の『富木殿御返事』に類似している。文永一二年（一二七五）三月の『曾谷入道殿許御書』における「円頓大戒壇建立」[60]の記事と合わせ見ると、円の三学と比較しながら本門三学（本門三大秘法）の実現を志向された日蓮聖人の内意をうかがうことができる。なお、最澄の円頓大戒壇建立については、『撰時抄』[61]、『報恩抄』[62]、『下山御消息』[63]などの諸遺文にも詳述されている。

したがって、伝教大師の円頓大戒弘宣に触れながら「本門教主の寺塔と妙法蓮華経の五字」の流布を期される文章に、三大秘法流布の意図を汲みと取ることができる。

『法華取要抄』には次のように述べられている。

如来滅後二千余年龍樹・天親・天台・伝教所レ残秘法何物乎。答曰本門本尊与二戒壇一与二題目五字一也。[64]

如レ是乱二国土一後出二現上行等聖人一本門三法門建二立之一一四天四海一同妙法蓮華経広宣流布無レ疑者歟。[65]

如来滅後正像二千年間における龍樹・天親・天台・伝教未弘の「秘法」を問う文を受けて「本門本尊与二戒壇一与二題目五字一也」と三大秘法を挙げられている。さらに「乱二国土一後」の末法時には「上行等の聖人」が出現して「本門の三法門」を建立するとし、その確信を「一四天四海一同妙法蓮華経広宣流布無レ疑者歟」と表明されている。この文脈から、龍樹・天親・天台・伝教未弘の「秘法」である「本門本尊与二戒壇一与二題目五字一」は、末法時出現の「上行等の聖人」によって建立される「本門の三法門」であり、それは「一四天四海一同広宣流布無レ疑」き「妙法蓮華経」であることが分かる。すなわち、日蓮聖人おいては、「本門の三法門」たる三大秘法は題目五字七字の「本門の題目」にほかならない。

さらに、『報恩抄』には次のように述べられている。

問云、天台伝教の弘通し給ざる正法ありや。答云、有。求云、何物乎。答云、三あり。末法のために仏留置給。迦葉・阿難等、馬鳴・龍樹等、天台・伝教等の弘通せさせ給はざる正法なり。求云、其形貌如何。答云、一は日本乃至一閻浮提一同に本門の教主釈尊を本尊とすべし。所謂宝塔の内の釈迦多宝、外の諸仏、

並に上行等の四菩薩脇士となるべし。二には本門の戒壇。三には日本乃至漢土月氏一閻浮提に人ごとに有智無智をきらはず、一同に他事をすてて南無妙法蓮華経と唱べし。此事いまだひろまらず。一閻浮提の内に仏滅後二千二百二十五年が間、一人も唱えず。日蓮一人南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経等と声もをしまず唱るなり。例せば風に随て波の大小あり。薪によて火の高下あり。池に随て蓮の大小あり。雨の大小は龍による。根ふかければ枝しげし。源遠れば流ながしというこれなり。周の代七百年文王の礼孝による。秦世ほどもなし、始皇の左道なり。日蓮が慈悲曠大ならば、南無妙法蓮華経は万年の外未来までもながるべし。[68]

天台・伝教未弘の正法として「本門の教主釈尊を本尊とすべし」（本門の本尊）、「本門の戒壇」、「南無妙法蓮華経と唱べし」（本門の題目）と三大秘法を挙げ、このことは「いまだひろま」っていないとして、「一閻浮提の内に仏滅後二千二百二十五年が間、一人も唱えず。日蓮一人南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経等と声もをしまず唱るなり」、「日蓮が慈悲曠大ならば、南無妙法蓮華経は万年の外未来までもながるべし」と日蓮一人の唱題と慈悲曠大の題目流布に論を展開されている。三大秘法の実践が南無妙法蓮華経の題目受持弘通に結ばれているのである。

一〇　むすび

以上から、『観心本尊抄』所顕の「観心法門」は、日蓮聖人の畢生の法門であり、それは末法の大法である三大秘法であることが分かる。

観心の本質・原理は一念三千である。日蓮聖人は、天台大師の『摩訶止観』所述の法門を原拠としつつ、これを本門寿量品文底に感得して、一秘即三秘の事行の法門として樹立されたのである。

したがって『観心本尊抄』題号の「観心本尊」は、三秘を内包した意義を有していると思われるのである。

すなわち、「観心本尊」は観心としての本門の本尊はもとより、観心としての本門の題目、観心としての本門の戒壇を内包した意義を有しているのである。三秘相即・三秘総在の「観心本尊」である。その三大秘法は具体的に実践し実現されるべき法門であるゆえに、日蓮聖人はこれを「事行」[67]と表現されたのである。

註

（1）『昭定』二七三〇頁。

（2）渡邊寶陽著『國寶観心本尊抄鑽仰』口絵写真。

（3）日耀『御書鈔』第八巻三～一二丁。日講『録内啓蒙』第一六巻一～六丁。日好『録内扶老』第六巻四丁。日輝『観心本尊抄略要』『充治園全集』第二編三一五頁。山川智應著『観心本尊抄講話』八五～一一五頁等。

（4）『昭定』五九〇頁・曾。

(5)『昭定』九五二～九五三頁・曾・断。
(6)『昭定』一二三八頁・曾・断。
(7)『昭定』一二四八頁・曾・断。
(8)『昭定』五一四頁・真。
(9)『昭定』七〇二～七〇三頁・真。
(10)『昭定』五六一頁・曾。
(11)『昭定』五九〇頁・曾。
(12)『昭定』七四五頁・日興写。重須本門寺蔵。日興写本については近年諸師の研究が報告されている。
(13)『昭定』七二一頁・真。
(14)『昭定』七二一頁・真。
(15)『昭定』六一九頁・真。
(16)『昭定』五七〇頁・曾。
(17)『昭定』五五二頁・曾。
(18)『昭定』七〇三頁・真。
(19)主に文永一一年七月二五日図顕以降から建治二年二月頃までの大曼荼羅。
(20)主に建治二年卯月図顕以降の大曼荼羅。
(21)『開結』八六頁。
(22)『開結』一三八頁。
(23)『昭定』一五二二頁・真。
(24)「如来現在猶多怨嫉況滅度後」『開結』三一二～三一三頁。
(25)六難九易『開結』三三八～三四一頁。
(26)三類の強敵『開結』三六二～三六三頁。
(27)「一切世間多怨難信」『開結』三八五～三八六頁。
(28)「以杖木瓦石而打擲之」『開結』四九〇頁。
(29)『正蔵』第三八巻一一四頁b。
(30)『昭定』五五六頁・曾。
(31)『昭定』一四四七頁・曾・断。
(32)『昭定』七〇四頁・真。
(33)茂田井教亨著『観心本尊抄研究序説』四頁。
(34)『昭定』七〇九～七一〇頁・真。
(35)『昭定』一二四六頁・曾・断。
(36)天台教学における四種釈などの用例や華厳経の引用文中における観心については、論旨が異なることからここでは挙げていない。
(37)『昭定』一一一九頁・断簡。
(38)『昭定』一二四六頁・曾・断。
(39)『昭定』五三九頁・曾。
(40)茂田井教亨稿「観心解釈の問題」『観心本尊抄研究序説』二五～二九頁、茂田井教亨稿「『開目・本尊』両抄をめぐる問題」『日蓮教学の根本問題』二五五～二五七頁、桑名法晃稿「日蓮聖人遺文における本門の意味―『開目抄』『観心本尊抄』を中心として―」『仏教学論集』第三〇号参照。
(41)『昭定』一二六二～一二六四頁・真。ただし、「美食を」以降は真蹟欠損か。『昭定』一二六三頁脚注参照。『日蓮聖人真蹟集成』は第九紙まで収録。
(42)密示戒壇については、山川智應著『観心本尊抄講話』には「本抄は此の事の戒壇をば、「賢王ト成ッテ愚王ヲ誡責ス」といふ、地涌菩薩の再誕の出現において密釈されてゐることは、後の「撰時抄」及び「三大秘法鈔」によって、これを知ることができるのである」（八〇頁）とある。望月歓厚著『日蓮聖人御遺文講義』第三巻には、「三秘の具不」の項を設けて、「本尊・題目を並べ明かす」としながらも、「宗旨の大事とは本門の三大秘法に外なら」ないから、本書には「隠約、文裏にこれを説く」とし、本時娑婆世界は「事壇建立の根底」であり「本国土妙」の戒壇、受持即成は「理の戒法受持」の「理壇」であると釈し、戒壇が隠約であるのは「一重の難事ゆえに将来に譲られた」（五六～五八頁）とする。
(43)「天台・伝教宣之本門本尊与四菩薩戒壇南無妙法蓮華経五字残之。所

詮一仏不二授与一故二時機未熟故也。今既時来。四菩薩出現歟。日蓮此事先知レ之」。『昭定』七九八～七九九頁・真。

(44)「如来滅後二千余年龍樹・天親・天台・伝教所レ残秘法何物乎。答曰本門本尊与二戒壇一与二題目五字一也」。『昭定』八一五頁・真。「如レ是乱二国土一後出二現上行等聖人一本門三法門建二立之一一四天四海一同妙法蓮華経広宣流布無レ疑者歟」。『昭定』八一八頁・真。

(45)「問云、天台伝教の弘通し給ざる正法ありや。答云、有。求云、何物乎。答云、三あり。末法のために仏留置給。迦葉・阿難等、馬鳴・龍樹等、天台・伝教等の弘通せさせ給はざる正法なり。求云、其形貌如何。答云、一は日本乃至一閻浮提一同に本門の教主釈尊を本尊とすべし。所謂宝塔の内の釈迦多宝、外の諸仏、並に上行等の四菩薩脇士となるべし。二には本門の戒壇。三には日本乃至漢土月氏一閻浮提に人ごとに有智無智をきらはず、一同に他事をすてて南無妙法蓮華経と唱べし。此事いまだひろまらず。一閻浮提の内に仏滅後二千二百二十五年が間、一人も唱えず。日蓮一人南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経等と声もをしまず唱るなり。例せば風に随て波の大小あり。薪によて火の高下あり。池に随て蓮の大小あり。雨の大小は龍による。根ふかければ枝しげし。源遠れば流ながしというこれなり。周の代七百年文王の礼孝による。秦世ほどもなし、始皇の左道なり。日蓮が慈悲曠大ならば、南無妙法蓮華経は万年の外未来までもながるべし」。『昭定』一二四八頁・曾・断。

(46)「所レ詮非二一念三千仏種一者有情成仏・木画二像之本尊有名無実也」『昭定』七一一頁・真。

(47)『観心本尊抄』の一念三千（観心）は十界互具論として展開し、第二〇番問答の答文において題目受持に結ばれる。『昭定』七一一頁・真。

(48)「一念三千の法門は但法華経の本門寿量品の文の底にしづめたり」『昭定』五三九頁・曾。

(49)『昭定』七二〇頁・真。

(50)「迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説て爾前二種の失一を脱たり。しかりといえどもいまだ発迹顕本せざれば、まことの一念三千もあらはれず、二乗作仏も定まらず。水中の月を見るがごとし。根なし草の波上に浮るにたり。本門にいたりて、始成正覚をやぶれば、四教の果をやぶる。四教の果をやぶれば、四教の因やぶれぬ。爾前迹門の十界の因果を打やぶて、本門十界の因果をとき顕す。此即本因本果の法門なり。九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界に備て、真十界互具・百界千如・一念三千なるべし」。『開目抄』『昭定』五五二頁・曾。

(51)「今本時娑婆世界離二三災一出二四劫一常住浄土。仏既過去不レ滅未来不レ生。所化以同体。此即己心三千具足三種世間也」。『昭定』七一二頁・真。

(52)『昭定』七一二～七一三頁・真。

(53)『昭定』七一二頁・真。

(54)『観心本尊抄』所述の一尊四士については、第二〇番の答文に続いて、第二一番の問文に次のように述べられている。「問正像二千余年之間四依菩薩並人師等建二立余仏小乗・権大乗・爾前迹門釈尊等寺塔一本門寿量品本尊並四大菩薩三国王臣倶未レ崇二重之一由申レ之。此事粗雖レ聞レ之前代未聞故驚二動耳目一迷二惑心意一。請重説レ之。委細聞レ之。」（『昭定』七一三頁・真）。ここでは「本門寿量品本尊並四大菩薩」との表現で一尊四士が示されている。さらに第三〇番の答文には次のように述べられている。「此時地涌千界出現本門釈尊為二脇士一一閻浮提第一本尊可レ立二此国一。月支震旦未レ有二此本尊一。日本国上宮建二立四天王寺一。未レ来レ時。以二阿弥陀他方一為二本尊一。聖武天王建二立東大寺一。華厳経教主也。未レ顕二法華経実義一。伝教大師粗顕二示法華経実義一。雖レ然時未レ来之故建二立東方鵝王一不レ顕二本門四菩薩一。所詮為二地涌千界一譲二与此一故也」（『昭定』七二〇頁・真）。ここでは「地涌千界出現本門釈尊為二脇士一一閻浮提第一本尊可レ立二此国一」「不レ顕二本門四菩薩一」との表現で一尊四士が示されている。なお、佐渡期の終わりに近い文永一一年正月一四日の『法華行者値難事』には次のように述べられている。「天

台・伝教宣レ之本門本尊与二四菩薩戒壇南無妙法蓮華経五字一残レ之。所詮一仏不二授与一故二時機未熟故也。今既時来。四菩薩出現歟。」（『昭定』七九八頁・真）。ここでは「本門本尊与四菩薩」との表現で一尊四士が示されている。

(55)『昭定』七一九頁・曾。
(56)『昭定』七四〇頁・曾。
(57)『昭定』七四三～七四四頁・真。
(58) 円戒が伝教大師没後に顕わされたことの理由として「為二事相一故一重大難有レ之歟」と述べられている。日蓮聖人が本門戒壇の名目をあげながらその内容について言及されることがなかったのは、このような思いがあったことによるのであろうか。なお、本門戒壇の内容について説示されている『三大秘法鈔』は真偽について相異した見解があることから暫くおく。
(59)『昭定』七四七～七四八頁・真。
(60)『昭定』九〇〇頁・真。
(61)『昭定』一〇二八～一〇二九頁・真。
(62)『昭定』一二四七頁・曾・断。
(63)『昭定』一三四三～一三四四頁・断。
(64)『昭定』八一五頁・真。
(65)『昭定』八一八頁・真。
(66)『昭定』一二四八頁・曾・断。
(67)『観心本尊抄』『昭定』七一九頁・真。

凡例

一、法華経は『真訓両読妙法蓮華経並開結』（平楽寺書店発行）に依り、『開結』と略称して表記した。

二、その他の経論は『大正新脩大蔵経』（大蔵出版社）に依り、『正蔵』と略称して表記した。

三、日蓮聖人遺文は立正大学日蓮教学研究所編『昭和定本日蓮聖人遺文』（身延山久遠寺発行）に依り、『昭定』と略称して表記した。

四、日蓮聖人遺文の真蹟現存の有無などについては次のように表記した。

真：真蹟現存遺文（真蹟が完全またはほぼ完全な形で現存する遺文）。
曾：真蹟曾存遺文。
断：真蹟断片現存遺文。
断簡：真蹟断簡現存遺文。
〇〇写：日蓮聖人の直弟〇〇師の写本現存遺文。

Summary

The Meaning of *Kanjin-honzon* in the title of the *Kanjin-honzon-shō* (観心本尊抄)

Gyōkō ŌTANI

The *Kanjin-honzon-shō* (『観心本尊抄』) is now widely accepted as the masterpiece of the great importance among the doctrinal treatises written by Saint Nichiren (1222-1282). Its formal title named by Saint Nichiren himself is the *Nyorai-metsugo-gogohyakusai-shi-kanjin-honzon-shō* (如来滅後五五百歳始観心本尊抄) meaning "the essential of *kanjin-honzon* revealed for the first time for five hundred years as the beginning of the long-term decadent age in five times five hundred (two thousand and five hundred) years after the passing of the tathāgata (the Buddha)." The person having shortened the formal titel to the *Kanjin-honzon-shō* is considered to be Toki Jyōnin (富木常忍) who received the treatise from the author.

This paper examines the meaning of the word '*kanjin-honzon*' (観心本尊) in the title of the *Kanjin-honzon-shō*. The conclusion is as following.

Kanjin-hōmon (観心法門) meaning '*kanjin* as the gateway of Buddhist teaching leading to enlightenment' revealed in the *Kanjin-honzon-shō* is the lifelong teaching of Saint Nichiren. And *kanjin-hōmon* is identified with *sandai-hihō* (三大秘法), meaning 'the three great secret formulas' of *honzon* (本尊, the principal object of worship), *daimoku* (題目, the title of the *Lotus Sutra*) and *kaidan* (戒壇, the site for ordaining) of *honmon* (本門, the true teaching revealed in the latter half of the *Lotus Sutra*) as the great formula (大法) suitable for the decadent age when the Buddhist teachings have been expireing (末法).

The essence or the principle of *kanjin* is nothing but the world view of *ichinen-sanzen* (一念三千) that the third power of thousands of worlds (三千) are included in a momentary mind (一念). Saint Nichiren learned and understood the theories described in the *Móhē-zhǐ-guān* (『摩訶止観』) written by Tiān-tái-tiān-shī (天台大師) Zhì-yǐ (智顗), and he realized the world view of *ichinen-sanzen* connoted in figurative passages of the

Chapter of Lifespan of the Tathāgata (如来寿量品) belonging to *honmon* in the *Lotus Sutra*. And then Saint Nichiren established a practical training method (事行, *jigyō*) of *ippi-soku-sampi* (一秘即三秘) meaning that the three great secret formulas (*sandai-hihō*) coverge on the single great sacret formula of *daimoku* of *honmon* and the single formula diverges into the three formulas.

Hence, it is conceivable that the word '*kanjin-honzon*' in the title of the *Kanjin-honzon-shō* has the meaning connoting *sandai-hihō* (the three great secret formulas), that is to say, that '*kanjin-honzon*' has the meaning connoting not only *honzon* of *honmon* as *kanjin* but also *daimoku* of *honzon* as *kanjin* and *kaidan* of *honzon* as *kanjin*. In other words, *kanjin-honzon* is the state that *sandai-hihō* or the three great secret formulas are identified mutually and the whole three formulas exist. As *sandai-hihō* should be realistically practiced and then fulfilled, Saint Nichiren represented it as *jigyō* (事行), namely, 'practical training'.